今週の為替相場見通し（2018年5月14日）

総括表		先々週と先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		108.76 ～ 110.02	109.38	107.80 ～ 110.80
ユーロ	（ドル）		1.1823 ～ 1.1978	1.1942	1.1800 ～ 1.2150
（1ユーロ=）	（円）		129.24 ～ 130.76	130.56	129.00 ～ 132.00
英ポンド	（ドル）		1.3460 ～ 1.3618	1.3540	1.3450 ～ 1.3650
（1英ポンド=）	（円）	*	147.06 ～ 149.31	148.15	147.00 ～ 149.50
豪ドル	（ドル）		0.7413 ～ 0.7568	0.7544	0.7400 ～ 0.7600
（1豪ドル=）	（円）	*	81.13 ～ 82.68	82.50	81.00 ～ 83.80

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　藤巻 龍太郎

⑴ 今週の予想レンジ：　107.80 ～ 110.80 円

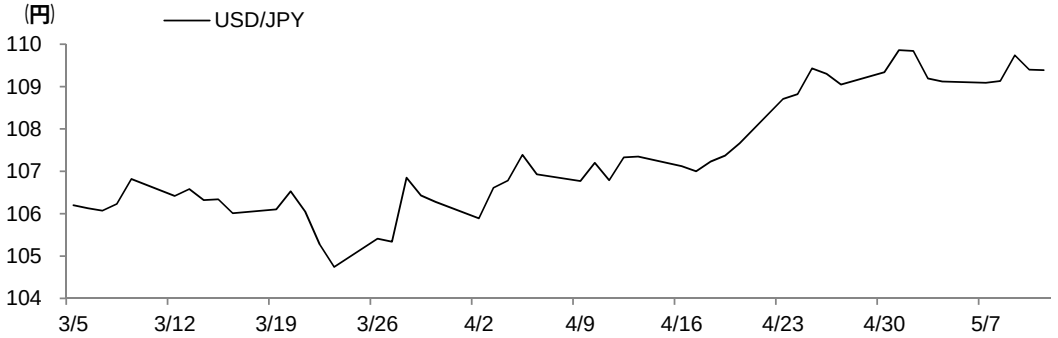
⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上下に激しい値動きとなった。週初7日に109円台前半でオープンしたドル/円は日経平均株価の軟調推移を受けて週安値となる108.76円をつけたが、ロンドン市場が休場となる中でドル買い優勢地合いに転じたため109円台半ばまで反発するも、堅調に推移していたNYダウ平均が上げ幅を縮小する展開に109円近辺まで下落。8日は米国のイラン核合意離脱に関する発表を控えて小幅なレンジ内で推移。NY時間に入り、トランプ米政権がイラン核合意からの離脱を正式に表明すると、直後は108円台後半まで下落したがすぐに買い戻された。9日は米国がイランへの経済制裁を強化し同国の原油輸出量が減少するとの思惑からWTI原油先物が約3年ぶりとなる1バレル=71ドルの水準まで上昇。米国における物価上昇圧力が強まるとの懸念から米10年国債金利が3%を上回る展開にドル/円は109円台後半まで急上昇した。その後は米4月生産者物価指数（PPI）が予想を下回ったことから109円台半ばまで戻す場面が見られたものの、すぐに109円台後半まで反発した。10日は一時週高値となる110.02円をつけたが、米4月消費者物価指数（CPI）が総合・コアともに予想を下回ると109円台前半まで急落した。11日のドル/円は特段目立った材料がない中、底堅く推移し109.38円で越週している。

今週のドル/円相場はレンジ内でのもみ合いを想定。米経済指標は以前ほどの勢いはないが引き続き良好なものが散見されており、FRBによる年内の利上げの可能性もあと2から3回残されている。また、米株についてもVIXが大きく低下するなど、落ち着きを取り戻している。北朝鮮情勢なども落ち着いていることから、基本的にはドル/円の堅調な推移を想定する。但し、ユーロや英ポンドなどについて投機筋のロングポジションが縮小するなど、これまでのドル買いを引っ張ってきた他通貨売りの勢いがなくなりつつあることは気がかりだ。また、米主導により貿易戦争懸念が依然として残っていることやイランをはじめ地政学リスクは高まりつつあることなど等を考えると、ドル/円がもう一段上昇するにはインフレが上昇するなど、材料が必要となるかもしれない。よって、何か大きなイベントがない限りは108から110円程度のレンジで基本的には推移するのではないだろうか。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（5/7～5/11）の値動き：　安値 108.76 円　高値 110.02 円　終値 109.38 円



（資料）ブルームバーグ

2．ユーロ

為替営業第二チーム　岡本 明生

⑴ 今週の予想レンジ：　1.1800 ～ 1.2150　129.00 ～ 132.00 円

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

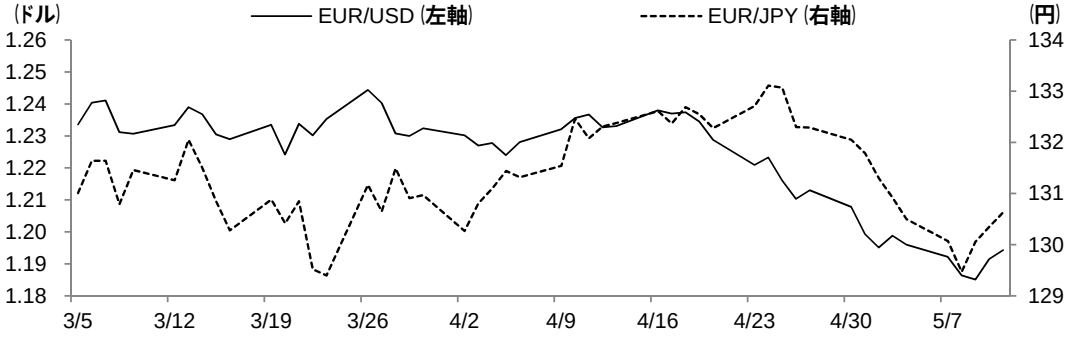
先週のユーロ/ドル相場は下に往って来いの展開となった。週初7 日に1.19 台半ばでオープンしたユーロ/ドルは週高値となる1.1978 をつけたが、独3 月製造業受注が予想を大幅に下回り、さらに2 月分も下方修正されると、ECB が早期に金融政策を正常化するとの見方が後退し一時1.19 を割り込んだ。8 日はイラン核合意を巡る不透明感からリスク回避の動きが強まりユーロ/円が下落するとユーロ/ドルは1.18 台半ばまで急落。その後は反発したが、トランプ米大統領からの核合意離脱の発表後は上値重く推移した。9 日はドル買いが強まったことから一時週安値となる1.1823 、ユーロ/円も129.24円をつけたが、株高を受けたユーロ/円の買いに1.18 台後半まで連れ高となった。10 日は米4 月消費者物価指数（CPI）の結果を受けたドル売りに1.19 台半ばまで上昇、ユーロ/円も週高値となる130.76円をつけた。その後はユーロ/円が売られる展開に1.18 台後半まで連れ安となったが、すぐに1.19 台前半を回復した。11日のユーロ/ドルは、1.19 台を割り込む場面あるも海外時間に入り1.196台まで上昇。その後は良好な米経済指標を受けたドル買いに押される場面もあり上値重く、1.1941レベル、対円では130.56レベルで越週した。

今週のユーロは、戻りを試す展開も上値は重いと予想する。先週の米4月CPIが予想比軟調な結果となったこともあり、ドル全面高の展開は一旦終わりを迎えた可能性が高い。長期的に見てもECBがテーパリングを進めるという方向感は変わっておらず、この1ヵ月で約▲4.5%下落したユーロには買い戻しが入りやすいか。しかし、短期的には市場予想比弱めな経済指標が続く中で積極的にユーロを買う材料にも乏しく、更にイタリアのポピュリスト政権樹立に向けた動きも重石となろう。現状では五つ星運動と同盟の2政党が連立政権樹立に向け交渉を継続しているが、合意に至った場合「反EU、反緊縮財政」を志向する政権が誕生することになり、昨年不安視されていたユーログループという枠組み継続に対する不安を再度煽ることになりかねない。関連のヘッドラインでユーロが急落する場面も想定されるが、その影響が即座に具現化する訳ではなく年初来安値に近い1.18台ではユーロ買いも入りやすいと思われ、下値は限定的だろう。今週は14日（月）にEU加盟国離脱に関する一般問題理事会、15日（火）に独1～3月期GDP（速報値）、ユーロ圏1～3月期GDP（改定値）が予定されているが、イベント通過後の週後半にかけてゆっくりと戻りを試す展開を予想する。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（5/7～5/11）の値動き：

（対ドル）	安値 1.1823	高値 1.1978	終値 1.1942
（対円）	安値 129.24	高値 130.76	終値 130.56



(資料) ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

⑴ 今週の予想レンジ：　1.3450 ～ 1.3650　147.00 ～ 149.50 **円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

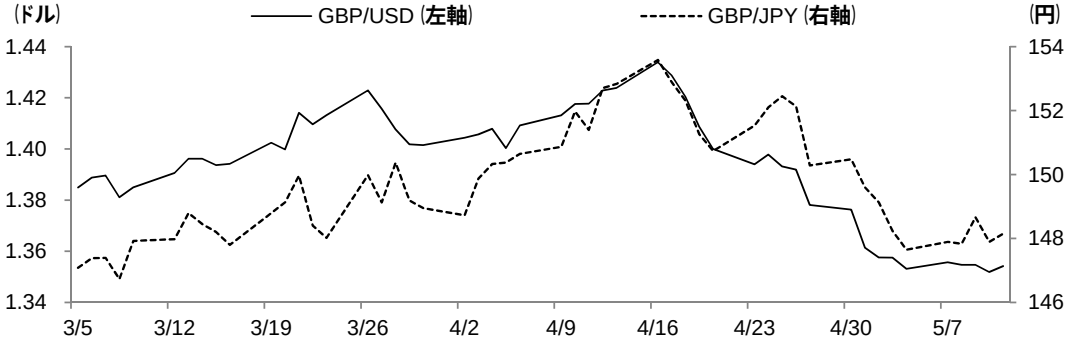
先週の英ポンド相場は、概ね横這い。対円、対ユーロなどでは、一時、上昇後、反落したが、対ドルでは、週を通してほぼ横ばいとなった。8日、本邦大手製薬会社がアイルランドのバイオ医薬品会社（ロンドン上場）買収で合意に達したとの報が届くと、買収資金手当てのポンド買いへの期待感からポンドは上振れ。しかし、その後、発表されたハリファックスの2～4月住宅価格が、市場予想の中心値前年比+3.2%を明確に下回る同+2.2%と発表され、ポンドは軟調に転じた。ここもと、住宅関連指標に対するポンドの関心は薄れていた感が強かったが、上記買収絡みで思惑的なポンド買い持ちポジションが積み上がったところ、主要住宅価格指数が、予想から1%ポイント以上も乖離するのは、昨年6月のネーションワイド住宅価格指数（予想前年比+1.9%のところ、発表は同+3.1%）以来のことで、相応の反応を誘ったということであろう。前後して、伊連立交渉の頓挫とやり直し総選挙の可能性が高まったとの観測からユーロが全面安に転じ、ポンドは、対ユーロでの反発にけん引される形で、対ドル、対円でも水準を持ち直した。その後、ポンドの関心は10日の英中銀金融政策委員会に集まっていった。英短期金利先物の値動きなどを見ると、2月以降、徐々に高まった5月利上げ期待は、4月上旬までに25bp利上げをほぼ100%織り込んだ後、大きく後退し、同日までにほぼ払拭されていた。その意味で、基準金利据え置きの決定には意外感などなかったはずだが、ポンドはまず小幅上昇に反応してから、急反落。直後のポンド買いは、2月同様、利上げ票が2票投じられた（7対2）ことに対する反応と思われたが、同時に発表された四半期インフレ報告書の成長見通しが下方修正されていた点などを嫌気して、その後、ポンド売りに転じたものと考えられた。

今週の英ポンド相場は、堅調気味の横這いを予想。英中銀四半期インフレ報告書における、英経済成長見通しの下方修正などを受け、年内の英中銀利上げの可能性は大幅に後退したとの見方が一部で聞こえるようになった。こうした変わり身の速さは、英中銀の2月金融政策委員会後に、一気に5月利上げの織り込みを進めた拙速な反応を彷彿とさせる。実のところ、英短期金利市場の値動きは、引き続き年内の25bp利上げを織り込んだ状態にあるし、金融政策委員会後のカーニー総裁の記者会見は、「困惑」という表現が当てはまるほど交錯した内容だった。同総裁は、英1～3月期GDPの下振れは、悪天候の影響が大きく、今後、反動で強い成長を見る可能性を示唆。金融政策を巡る環境は、2月時点と大きくは変わっていないと主張。にもかかわらず、利上げを見送っただけでなく、成長見通しも引き下げられたことで、同記者会見におけるメディアの質問は、こうした「困惑」を招いた同中銀の「市場との対話」に集中し、あたかも一貫性の欠如を咎めるかのようであった。ポンド動向を占う上で、もうひとつの重要な材料である、英のEU離脱交渉の混迷を考慮すれば、確かに、英経済の先行きには悲観的にならざるを得ないし、実際に利上げが当面見送られる可能性は考えられよう。しかし、英中銀の情報発信だけを鵜呑みにし（政策決定をするのが英中銀である以上、重視するのは当然ではあるが）、現時点で、年内利上げが潰えたかのような議論も、また、ポンド安の方向感を形作るほどの合意形成は進まないように感じられる。こうした環境下、15日（火）の1～3月平均賃金には、金融市場も敏感な反応を見せる可能性が警戒されよう。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（5/7～5/11）の値動き：

（対ドル）	安値 1.3460	高値 1.3618	終値 1.3540
（対円）	安値 147.06	高値 149.31	終値 148.15



（資料）ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部シドニー支店　山口 美紀

⑴ 今週の予想レンジ：　0.7400 ～ 0.7600　81.00 ～ 83.80 **円**

⑵ ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

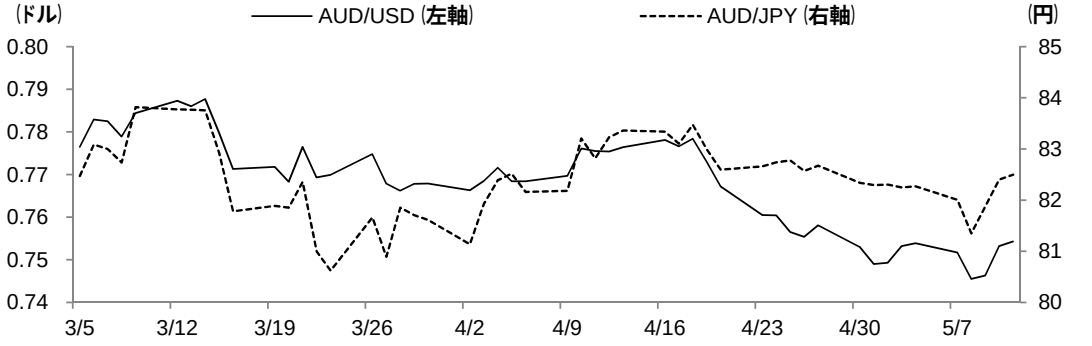
先週の豪ドル相場は、下に往って来い。0.75半ばで始まり、年初来安値0.7414まで下落するも、結局0.75半ばに戻して取引を終えた。7日、豪ドルは0.75半ばでオープン。ロンドン市場が休場で市場参加者少ない中、目立ったニュースも無く、横ばいで推移した。8日、豪3月小売売上高が市場予想（前月比+0.2％増加）を下回る前月比+0.0％となり、豪ドルは0.74台に下落。また、同日夜に、豪州では2018/19新年度予算案が発表された。本年度と来年度は財政赤字となるものの、19/20年度に黒字へ転換、その後、20/21年度と21/22年度は黒字が続くとした。経済見通しについては、本年度の2.75％から、新年度～21/22年度は3％に上昇し、安定成長が続くとしている。前年公表内容とほぼ同様のものとなり、サプライズ無く、金融市場への影響は限定的だった。また、米国のイラン核合意離脱に関する発表を控えて、リスクオフの動きが強まり、豪ドルは0.74半ばに下落。海外時間にてトランプ米政権がイラン核合意からの離脱を正式に表明。米国がイランへの経済制裁を強化し同国の原油輸出量が減少するとの思惑からNY原油先物（WTI）が約3年ぶりに71ドルの水準まで上昇。米国における物価上昇圧力が強まるとの懸念から米10年国債利回りが3％を上回ると、ドル買いが進行し、豪ドルは0.74半ばに下落。翌日も豪ドルじり安の展開が続き、豪ドルは年初来安値0.7414をつけた。しかしその後、米4月生産者物価指数（PPI）が市場予想を下回ったことから、ドル売りとなり、豪ドルは0.74半ばに反発。10日、米4月消費者物価指数（CPI）が総合・コアともに予想を下回ると、豪ドルは0.75台に上伸した。11日、前日のドル売りの流れが継続し、豪ドルは0.75半ばに小幅上昇して、取引を終えた。先週の豪ドル/円は小幅に上昇。82円前半で始まり、81円前半まで下落するも、その後82円半ばに反転して取引終了。7日、豪ドル/円は82円前半でオープン。翌日、予想を下回る豪3月小売売上高を受けた豪ドル売りや、米国の核合意離脱を背景としたリスクオフの動きから、豪ドル円は81円前半まで下落した。9日、ドル円の上昇を受けて、豪ドル円も81円後半に反転。10日、豪ドルの上昇を背景に、豪ドル円は82円台に上伸。翌日も82円台での推移が続き、取引を終了した。

今週の豪ドルは上値重い展開を予想する。先週発表された豪州新年度予算案では、所得税や法人税などの税収拡大などにより、2019/20年度に連邦政府が22億豪ドルの黒字に転換することが発表されるとともに、昨年の増税宣言から打って変わり低・中所得者からの支持を得るための所得税減税が前面に打ち出された。来年11月までに実施される連邦議会総選挙を見据えた庶民受けしやすい予算案となった。また、ターンブル政権は賃金上昇率の引き上げを課題としてきたが、予算案の内容を実現することを前提とし、本年度の2.25％から今後4年間に3.5％へ上昇すると見込んでいる。かかる中、今週16日（水）の2018年1～3月期賃金上昇率には注目が集まる。市場予想は前年比+2.1％となっている。予想数値は政府や豪準備銀行（RBA）の見通しどおりだが、長期平均と比較すると低い水準であり、インフレ懸念高まりにくく、豪ドルは安値圏でのもみ合い推移を予想する。また、以下の経済指標や講演にも注目だ。15日（火）：デベルRBA副総裁講演（議題：豪州経済見通し）、RBA議事録、17（木）：豪4月雇用統計。

⑶ 先週までの相場の推移

先週（5/7～5/11）の値動き：

（対ドル）	安値 0.7413	高値 0.7568	終値 0.7544
（対円）	安値 81.13	高値 82.68	終値 82.50



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。